南伊勢町（みなみいせ）

人物 南伊勢町

河村瑞賢（かわむらずいけん）

河村瑞賢は、今から約400年前に、現在の南伊勢町東宮（とうぐう）で生まれました。13歳の時、江戸へ旅立ちます。江戸に着いてからは、車力（しゃりき）という仕事につきました。そして、20歳を過ぎると材木商へと変わります。その材木商の時、江戸で明暦（めいれき）の大火（たいか）（1657年）が発生し、木曽で大量の材木の買（か）い付（つ）けに成功して、その材木を売り巨額の富を得て大商人となりました。明暦の大火後の江戸の復興（ふっこう）には、建築請負（うけおい）業として活躍し、それが幕府の目にとまり御用商人（ごようしょうにん）となりました。

翌年の1658（万治（まんじ）元）年にも大火があり、幕府の命令によって運河（うんが）の掘削（くっさく）工事や、橋の設置工事などで江戸の町の復興に活躍（かつやく）し、東北地方の米や物資の搬送航路（はんそうこうろ）の開発依頼を幕府から受けました。それが有名な東廻（まわ）り航路、西廻り航路の開発で、従来の運搬方法より効率よく、早く東北地方の米や物資が江戸に届けられるようになりました。

また、この航路の開発によって、日本海側の物資が大量に大阪の町に集まり、大阪が「天下の台所」と呼ばれるようになりました。

その後、瑞賢は淀川（よど）河口の洪水（こうずい）の氾濫（はんらん）を防ぐための治水（ちすい）工事である安治川（あじ）の掘削（くっさく）工事や銀山開発などに着手し、5代将軍綱吉（つなよし）にその功績（こうせき）が認められ、瑞賢の名声はさらに全国へ広まりました。

河村瑞賢（南伊勢町提供）

▪ 郷土の偉人の業績と、今のくらしのつながりについて調べてみましょう。

年中行事
南伊勢町

竈方祭り

南伊勢町内の地名に、竈の字がつく地名が7か所あります。以前は、赤崎竈という地名もありましたが、他の地区に統合されてなくなってしまいました。伝説によると、今から約700年前、平維盛の子孫行盛を中心にした落ち武者の一族が、南伊勢町内の海岸部の8か所に分かれて定住し、それが八ヶ竈集落（竈方）となったそうです。

竈方の人々は、海から汲んだ海水を竈に入れて沸騰させてつくる塩作りを仕事としていたので、地名に竈の名がつきました。製塩には多量の木材を必要としたので、竈方の人々は、山の権益（共有林）を守るために、南北朝の戦いや関ヶ原の戦いなどに参戦しました。戦乱終了後には、幕府などから山の権利を認める証文を受け取り、製塩業を続けることができました。

竈方の人々は、その証文をとても大切にし、先人の犠牲や苦労を忘れることがないよう儀式として残しました。それが現在も続いている竈方祭りです。

竈方祭り（伊勢志摩きらり千選提供）

▪ 身近な地域に伝わる貴重な伝統行事について調べてみましょう。

自然
南伊勢町

内瀬のハマボウ群落

伊勢市から南へ約25km、熊野灘に面した五ヶ所湾に流れ込む伊勢路川河口の中洲に、本州では最大級のハマボウの群落があります。

ハマボウは、三浦半島から西の暖かい地方の海岸の泥浜に生える落葉低木です。亜熱帯性で、ハイビスカスの仲間です。典型的な汽水域（海水と淡水が交じり合う場所）の植物で、その生育環境は、マングローブとよく似ているため半マングローブともよばれます。真夏には、黄色のきれいな花を咲かせます。晩秋には、葉が赤色や淡いオレンジ色に染まり、紅葉のハマボウもとてもきれいです。

ハマボウ群落（南伊勢町提供）

ハマボウの種子は海流で散布されるため、河口域入江に自生地が多く見られます。

伊勢湾台風後の護岸堤防工事や洪水、台風などの自然災害で、ハマボウの数も減少してきています。全国的にみても貴重なハマボウが、これ以上なくならないように私たちは大切にしなければなりません。

▪ あなたの身近にある、水辺に生える貴重な植物や樹木について調べてみましょう。

天然記念物
南伊勢町

押淵の暖地性シダ群落

南伊勢町のほぼ中心に位置する押淵地区の山間部に、1928（昭和3）年に国の天然記念物に指定された鬼ヶ城暖地性シダ群落と細谷暖地性シダ群落があります。

南伊勢町と度会町との境界近くの山地の北斜面に、大昔、鬼が住んでいたと語り伝えられている奥行きが9mほどの洞穴があります。付近は絶壁が多く、岩の上に暖地性シダが多く生育しています。その付近一帯が鬼ヶ城シダ群落です。主要なシダ類は、アツイタ、キクシノブなどです。特にキクシノブは岩面に良く生育し、アツイタも急斜面に多く見られました。

もう一つの指定群落は、鬼ヶ城シダ群落から西方に約2kmの山間の細谷に位置しています。一帯は、スギの造林地となっています。その造林地の中に岩が露出して植林できない場所に、リュウビンタイ、ナンカクラン、キクシノブなどのシダ群落がありました。現在この両指定地は、乱獲と環境の変化によって絶滅の危機にあります。

暖地性シダ群落（南伊勢町提供）

- あなたの身近にある、山辺の貴重な植物や樹木について調べてみましょう。

COLUMN コラム 地震の後の津波

志摩半島から熊野に続く海岸線に多くみられるリアス式海岸の地形は、湾が深く入り組み複雑な海岸線を形作って風光明媚ですが、一度大地震が起きると大津波の発生が予想されます。

1944（昭和19）年に発生した東南海地震（M7.9）は、熊野灘沿岸の村々にも甚大な被害をもたらしました。熊野市二木島町に住んでいる古老は、「大地震で広場に避難して海をみると、海面がどんどん退き始めほとんど水がなくなり、海底が見えるほどになった。次に海底が天ぷら油を煮立てているようになった。大勢の人が「津波が来た!」と叫んだ。一気に波が逆流し10m近い津波が押し寄せ、漁船や家屋を押し流し根こそぎ持っていった。その時、多くの人命も失われ、町は廃墟と化した」と話してくれました。そのため、この地方では、津波の恐ろしさについて、人から人、親から子へと言い伝えられており、津波に対する備えも万全です。

しかし、東南海地震から50年以上経過した今日、地震に対する警戒心が薄れてきているのも事実で、三重県に住む私たちは地震に対する対策をしっかり取り、いざという時に備えなければなりません。

【→P61】

東南海地震津波到達地点碑